

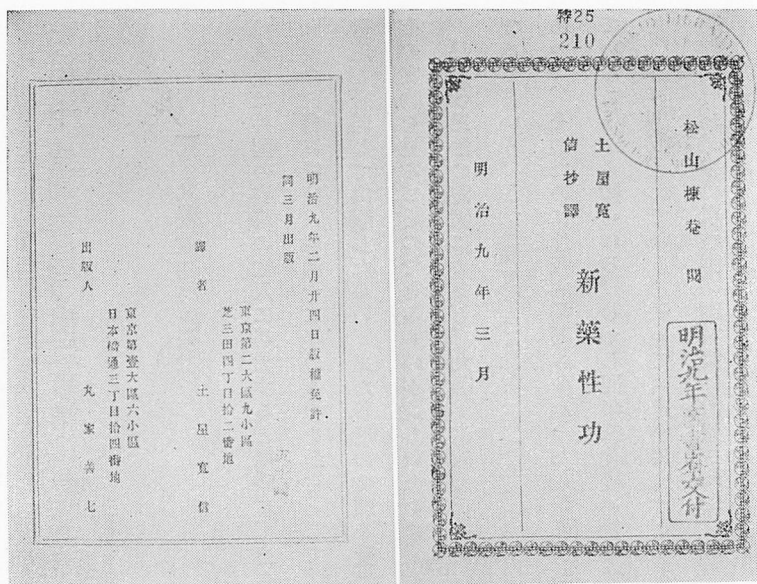
第十章 初期の出版事業 (一)

一 丸善最初の出版物

丸屋は外国の書籍の輸入に努力すると同時に、自らも圖書の出版に従事することとなった。ただ現在存している丸善の図書目録は、明治十二年のものを最古として、明治十六年、明治十七年のものがあるが、その中には、他の書店と合同して出版したもの、また著者の依頼を受けて発兌したものもある。また目録に載っている書物で、現在その実物を見ることができるものが乏しいために、その全容を尽すことができないのは、甚だ遺憾である。

早矢仕民治の記憶によると、丸善が出版した最初の書籍は、明治九年〔五月〕に上梓された「開化先導民家要文」であるという。「民家要文」は大本二冊であって、内田嘉一（如球）の編述に係る。平易に書かれた書簡の文範であって、そのために比較的需要も多かったらしく、かなり後まで行われたことは、明治十六年の販売目録にも載っていることから知られる。しかし同年三月に「新薬性功」が、土屋寛信によって抄訳され、松山棟庵の校閲を経て、丸屋から出版されている。従って「民家要文」よりも、この方が年代的に先になるといわなければならない。「新薬性功」は、幸に現在国会図書館に所蔵されている。一〇二頁の小本である。土屋寛信の序文に

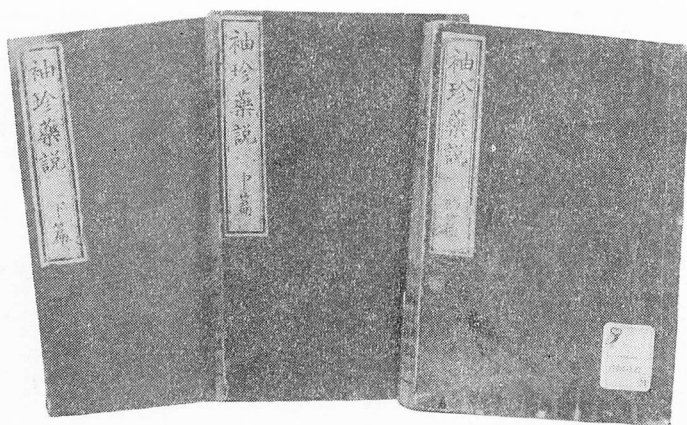
「（前略）抑々方今文運日ニ盛ナリト雖モ、僻境ノ医家未タ横文ヲ読ム者少ナク、幸ニシテ貴重ナル新薬ヲ得



土屋寛信抄訳「新薬性功」(国立国会図書館蔵)

ルモ、訳書ニ由ルニ非サレハ、其性功ヲ知ル能ハ
 ス、或ハ一二横文ヲ読ム者アルモ、恐クハ近來ノ
 書ニ乏シクシテ、新薬ヲ知ルニ難カランカ、余モ
 亦曾テ僻境ニ寓シ、正シク此困苦ヲ嘗メタリ、因
 テ思フニ假令浅陋ナル訳書ヲ著述シ大方君子ノ笑
 ヲ取ルモ、之ヲ僻境ノ医ニ示サム豈少補ナカラン
 ヤト、是ニ於テ更ニ原書ヲ繙キ一二抄訳シテ殆ト
 小冊子ヲナセリ、名ケテ新薬性功と云」

とあって、その翻譯の趣旨が知られる。その凡例によ
 ると、主として一八七二年（明治五年）刊行の合衆国
 局方について抄訳したものであるが、その他に「頓屈
 利孫」の医学字彙及びイルリス氏の調薬則等を参取し
 ている。病名薬名等はすべて先人のものに従がい、訳
 例のないものは、訳者がこれを定めて、原語を付記し
 ている。薬名はすべてイロハ順に列記してあるので、
 イグナチア・チンキにはじまり、蓚酸セリウムに終る。



桑田衡平訳「袖珍藥説」

当時としては、地方の医師に便宜を与えたものであろう。巻尾には明らかに出版人として丸家善七の名が記されている。

ところが珍らしいことには、明治三年に出版された「袖珍藥説」という上中下三冊の小本がある。（上巻は本文九十八枚、中巻は本文七十七枚、下巻は本文九十枚ある）。アメリカのウェーゼスの「ポケット・ドース・ブック」を桑田衡平が訳し、柳川春陰が校閲したものである。これには山城屋佐兵衛と島村利助と共に、丸屋善七が発兌元として名を列している。いふなれば三家の共同出版であるが、丸善が書籍の刊行に手を染めたことが、明らかに立証されるのは、これを嚆矢としなければならない。まして桑田衡平は、早矢仕有的が医業を棄てた際に、その後事を委ねた当人であるから、その交わりの親密であったことは、察するに難くない。従がって、名義上三書店の共同出版にしても、主としてその事に当たったのは、丸屋ではなかったかと想像される。幸いにこの書物は丸善に現存している。

桑田衡平は更に一八七一年刊行の本書の新版に基づき、これに一八七五年刊行のアメリカのデイスペンサトリー及び一八六七七年のイ



ハルツホールン

めてあるものもあるが、これはやや後版らしい。この書は和綴の小本で二十二冊ある。鉄幹斎蔵梓とあるのは、恐らく桑田自身の号であろう。

凡例によると本書はアメリカのペンシルヴェニア大学の健全学（衛生学）教頭兼内科助教であったヘンリー・ハルツホールン（Henry Hartshorne）の著書の第二版（一八六九年）の第二編を訳述したものである。呼吸器・循環器・消化器・肝・脾・腎・膀胱の諸病症と、その治療法について記述している。

この書物は当時の要求に応じて、需要が多かったと見えて、明治八年（十月）に、第四版によってその増訂版が刊行されている。型は背革の洋装本で、当時としては立派なものである。価格は二冊で六円であった。当時の他の物価と比較してよほどの高価であったことがわかる。その内容には、各種の伝染病とその治療法とを記述している

ギリス薬局方の書物を参考して、大いに改訂を加え、明治九年三月に、和装二冊本、また洋装一冊本として刊行している。この二冊本も、幸に現在国会図書館に所蔵されている。

ところが同じく桑田衡平が訳述し、島村鼎の校閲した「内科摘要」が、同じく山城屋と島村と丸屋とを発売書林として、明治五年（十月）に出版されている。ただし第二巻までは、奥付に丸屋の名がなく、島屋善六の名義となっており、それ以後の巻では丸屋が島屋に代っている。別に島屋の名を除いて、これを丸屋に改



桑田衡平訳「内科摘要」

ほかに、初版になかった各種の顕微鏡図が挿入されている。

ここに珍らしく、明治八年一月に、横浜の丸屋本店で発行された書籍がある。

世界奇談 三冊 久保扶桑訳述

木版で、巻之一は二八丁、巻之二は三七丁、巻之三是二九丁である。

巻之一は十一節に分れ、旧約聖書に見えるバベルの塔の建設の物語から説き起して、寒帯地方の人文について述べ、エスキモーの風俗、グリーンランド人の生活、ラップランド人の生活、フランクリンの北極探検のことを記している。フランクリン (Sir John Franklin, 1786—1847) の探険事業について、邦文で伝えたものは、恐らくこれが最初であろう。

巻之二にはアイスランドの自然地理、特にその温

泉、また潮流即ちガルフ・ストリーム（メキシコ湾流）について述べ、ついで北アメリカの土人の習俗について記し、終りに煙草・馬鈴薯・野鳩・海狸・マホガニー・木綿等の産物について述べている。

巻之三は前巻に引き続いて、南アメリカについて記述し、特にブラジルを中心として、生物界の興味ある事実、猿が橋を作って河を渡る話とか、蟻の戦争とか、食^{ありく}蟻獸とか電氣鰻とかについて記し、更にダイヤモンドの探索や、瘡疾（マラリヤ）の薬とか、パタゴニア国の事情を述べている。

本書は、翻譯であるが、その原書はいま尋ねがたい。

訳者久保扶桑は、名を鼎助といい、安房の人で明治四年に慶応義塾に入門し、十一年に三菱に入社して、以来実業界に活動した人物である。前年に青木輔清訳の「万国奇談」（三冊本）が出版されて、世間の歡迎を受けたので、それに倣ったものであらう。しかし本書には、三冊とも多くの挿絵があつて、一般の興味を惹くに充分である。恐らく当時においては、啓蒙的な読物として喜んで迎えられたものであらう。なお注意すべきことには、丸善の横浜本店丸屋善八名義で刊行された書籍は、知られる限り、この一種だけであることである。

諸芸人名録

西村隼太郎編

和一五八丁

明治八年十月

著者の付言に

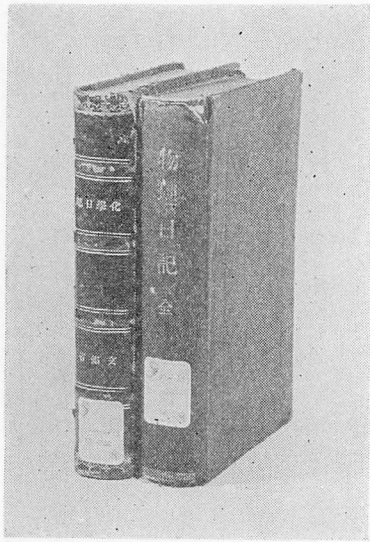
「凡ソ諸芸道ノ興廃アルヤ、猶草木ノ榮枯アルガ如シ（中略）其古木ト新ラシ樹トヲ観分ケテ職司ニ語リ聞ヘ、先概略ニ順序ヲ定メ、遊詠雅客ノ枝折ニセント、一小冊ノ人名帖ヲ著ス（下略）」

とある。

いわゆる芸能人の人名録であって、丸善の出版物としては極めてめずらしい性質のものに属する。まず諸芸頭取世話方、賦金上税高について記し、そのあと諸芸人の人名を記している。それは頗る広汎にわたったもので、能狂言（観世、金春、宝生、金剛、喜多の各流）、吾妻能狂言、琵琶、琴曲、七弦琴、二弦琴、一弦琴、尺八、笛、清樂^{すがき}等の諸和楽から、野呂間人形遣、義太夫節、操り人形節、一中節、河東節、長唄の諸芸人を列挙し、更に鳴物として、新内節、常盤津節、富士節、清元節、岸沢節、歌沢節、小唄節、松廼家節を記している。次に俳優の部があり、櫓付、振付の部があり、櫓付浄瑠璃の部があり、踊指南の部がある。踊指南の部では、岩井半四郎、坂東三津五郎、中村芝翫、市川団十郎、中村仲蔵、市川門之助、花柳寿助、西川巳之助の門弟が列挙してあり、その他に坂東、沢村、藤間、水木、以下十七家が挙げられている。次に軍談師（講釈師）と落語の部があり、落語の後に、音曲、写絵、手品、八人芸、物真似等が列挙してある。興味が深いのは、芸妓が芸能人として、ここに挙がっていることで、当時の東京の各地の花街二十六カ所の著名な芸妓の名簿がある。明治初年の演芸界、或は花柳界の事情を知るためには、大いに参考となるものであろう。

二 明治十年代の出版物

このように、丸善の出版物はかなり早くからあるが、実際に丸善が出版事業に力を注いで、各種の書籍を刊行するようになったのは、やはり明治十年頃からとしなければなるまい。この年の九月には、小幡篤次郎の翻譯した



リッテル口述「化学日記」及「物理日記」

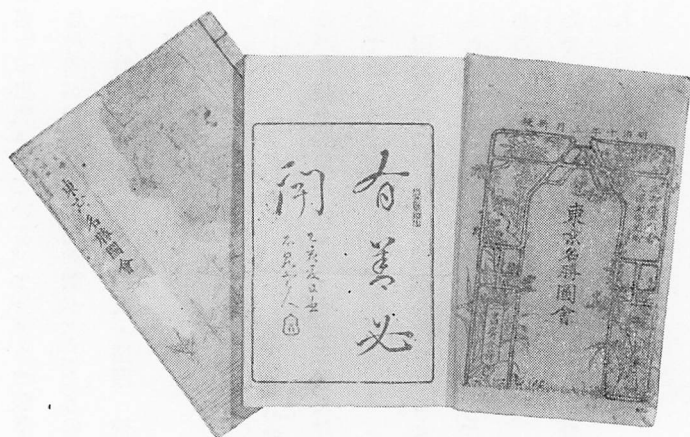
「弥児氏宗教三論」が出版されている。一八七四年に刊行されたミルの原著 J. S. Mill—The Three Essays on Religion, Nature, the Utility of Religion and Theism を、三冊に分けて公けにしたものであろう。ミルの日本語訳としては、早く明治五年に出版された「自由之理」中村正直（敬字）訳があるが、本書は恐らくこれに次ぐものに属する一書であらう。

三月には「化学日記」が出版された。翌十一年十一月に出版された「物理日記」と一対を為すものである。共に洋装で、前者は四四八頁、後者は五九六頁ある。これはドイツの理学博士ヘルマン・リッテル (Herman Ritter) が大坂理学所で、明治三年十二月から同五年九月に互って講義したものを、文部省が訳述したものであって、物理学、化学の両科について、はじめ「理化日記」として分冊で公けにしたものを、後に物理学と化学とに類別して刊行したものである。「化学日記」のタイトル・ページには明治七年五月とあるから、あるいは初版はその頃であらうか。「化学日記」は五十二回にわたって、各種の原素及びその化合物の性質について説明し、「物理日記」は百十五回にわたって、力学（固体・液体・気体）音響学・光学の各種の現象、及びこれを応用した器械について講述している。恐らくその当時の最新の知識を輸入したものであって、自然科学の学徒を啓発したことは、多大なものがあつたであらう。

「化学日記」「物理日記」は、やや高級であるが、初歩の教科的のものとしては、同年に「達尼敦氏学校用生理書」が出版されている。アメリカの医学博士ダルトン (J. C. Dalton, 1825—1889) の原著を、今井金吾が訳して島村鼎が校閲し、庄司秀鷹が序したものである。和綴六冊であるが、筆者の見たことを得たのは、四冊だけである。十八篇に分って、消化・呼吸・循環・神経の各器官・發育論並に食物及びその成分について平易に記したものである。

これに類するものには「学校用物理書」がある。ロンドンのマクミラン社から発刊された「サイエンス・ブライマース」(科学初歩)の中から物理学の部分を抜萃したもので、山岡謙介が翻譯して小林義直が校閲したものである。和綴全四冊であるが、今は三冊だけ存している。当時の最新の学説を紹介しているので、生徒には便利であったであろう。

明治五年に新たに学制が公布されると共に、文部省内には編輯寮が設けられて、さまざまな教科用の図書が編集された。「官版物理階梯」(三卷)は、その中でも最も早く出版され、またその後も久しく行われた代表的ものである。しかしその内容はかなり高度で、記述もまた生硬であったから、初等程度の教科書としては、必らずしも適當ではなかった。丸屋出版の前記の両書などは、その点で、これを補なうために、かなりの寄与をしたように思われる。



岡部啓五郎編「東京名勝図会」

大郷穆の序文に

「仏国之法周密至レリ。而シテソノ制ニ三善アリ。曰ク官ヲ立ツルコト厳肅ナリ。曰ク獄ヲ設クルコト広潔ナリ。曰ク囚ヲ待ツコト懇到ナリ。蓋シ官ヲ立ツルコト厳肅ナルハ、法先ヅ吏ニ行ハルルナリ。獄ヲ設クルコト広潔ナルハ、威ヲ下ニ襲サザルナリ。囚ヲ待ツコト懇到ナルハ、刑^{ヅイ}寛ニ仁ニ帰スルナリ。コノ三者ヲ觀レバ、法ノ大要炳タリ。」（下略、原漢文）

とある。本書の原著者アンリ・ド・リベロールについては知るところがないが、その内容は七章に分たれ、警視法の沿革・警視局の庶務・拘留檻から、裁判所総則・重罪裁判所・陪審人・糾問・訟延・獄舎の沿革・マズアー檻等を叙している。フランス革命の前後を比較しながら、フランスの警察、裁判所の沿革と任務の実態、獄舎の建物・設備から囚人に対する待遇を説明したものである。叙述は簡単であるが、なお江戸時代の牢獄の名残を留めている当時としては目新らしく、また行刑史上若干の参考とすべき文献であろう。

明治十年にはまた岡部啓五郎の編纂した「東京名勝図会」木版、

上下二冊が出版された。旧江戸の名勝に關しては、すでに「江戸名所図会」の巨冊があるが、本書は神社仏閣などについては、ほぼこれに従ってその要を摘み、それと同時に明治以来の新施設で注意を惹くものを、十一大区に分けて列記したものである。第一大区では日本橋、国立銀行、三井呉服店、第三大区では九段招魂社、第四大区では師範学校などが、新名勝として挙げられているのが面白い。記事は比較的簡單であるが、大沢南谷の描いた木版の挿絵（その中には二頁に互るものもある）が数多く入っていて、建物ばかりでなく、当時の世態風俗を伝えて、すこぶる参考となる。

なおこの書は明治十七年に再版を發行している。再版本は附録を加えて三冊となっている。附録には小島彦七の編輯した東京沿革略記、名勝古蹟の所在地表、府県里程系表、日本橋を起点とした府下各地への里程概表、府下区郡分け町村名、宮殿及び諸官署表を収めていて、なかなか便利である。明治二十五年の丸善の発兌書籍目録によると、定価は五十五錢であった。

明治十一年には鈴木田の「容術新題」が出版されている。これはその前年に東京数学会社（後の日本数学物理学会）が創立された際に、稿成って提出された和算の問題集である。遠藤利貞の「日本数学史」には

「類題一百実ニ一術ヲ以テ之ヲ得ルモノニシテ、古今ノ奇題ナリ、此一書ヲ見ル者誰カ其勉メタルヲ感賞セザランヤ、先ニ山上光道カ著シタル異形同術ニ勝レルモノナリ」

と賞讃している。江戸時代に独自の発達を示した和算は、明治初年に洋算が輸入されて、それが初等教育に採用されるようになったために、全くその姿を失なうようになったが、本書は実にその最後の残光を示すものということ



尾崎行雄訳「公会演説法」 矢野文雄訳「英米礼記」

ができるであろう。

この頃の出版物で、やや異色のあるものが二つある。一つは矢野文雄（龍溪）の「英米礼記」で、一つは尾崎行雄（学堂）の「公会演説法」である。前者は明治十一年の出版で、いわばヨーロッパの作法書である。イギリス及びアメリカの礼法書を対照して編纂したものである。紹介・挨拶・衣服・談話から舞踏・音楽・婚儀・葬儀に及び、すべて二百一条ある。文明開化の風潮の中で、ヨーロッパ人との接触が多くなった当時にあつては、交際上の好参考書であつたであろう。

後者は明治十二年の出版であるが、題名に増訂と冠し、中村正直の序文に明治十年とあるから、初版は恐らくその頃に発行されたものであろう。なお十二年〔九月〕には、「続公会演説法」が出版されている。達弁（雄弁）の起原並びにその能力・声音の節奏・身体の挙動（ジェスチュア）・演説の分解・演説を用う

べき場所等について説明し、続篇では演繹法・帰納法を説明し、ジェスチュアの手足の位置まで図解してある。公開演説が漸く行われるようになった時代であるから、この種の書物も相当の影響を与えたことであろう。なお雄弁家としてデモッセンス（デモステネス）の名と、そのフィリップ（プイリポス）弾劾のことを伝えたのは、恐らく日本でこれが最初ではあるまいか。

序に記して置く。日本で公衆に対するスピーチ・デバートが紹介されたのが、明治四年に公けにされた福沢諭吉の「会議弁」であり、スピーチを演説と呼ぶことも、ここにはじまったことは、周知の事実である。そしてこれが実行に移されたのが明治七年即ち台湾征討の役のあった頃であったことも、福沢自身の語るところである。明治八年には三田に演説館が落成し、公衆の傍聴者は四百余名に達したという。以来三田演説会は、最近まで引続いて行われている。

ところが明治九年十月二十一日の「東京日日新聞」に次のような広告がある。

毎週水曜日午後第七時ヨリ銀座鎗屋町七番地ニ於テ福沢諭吉・小幡篤次郎・江木高遠・井上良一・矢野文雄出席致シ演説講義相始メ候間此段告知致候但十一月一日初会ヲ開ク聴講切手ハ左ノ場所ニテ売渡申候

通り二丁目 丸屋善八

両国薬研堀 報知社

銀座鎗屋町七番地 医学会社

十月 講談会執事

これによると三田の塾外での公開演説は、この頃にはじめて行われたもののように思われる。その入場に聴講切手（入場券）を発行したのも面白いが、丸善がその発売に参加していることも、明治文化史の上から興味の深いことである。

英国救貧論

第一卷

横山初訳

明治十二年十二月

五三頁

緒言に

「原本ハ一千八百七十八年英国医学博士某氏ノ著交際学原論ト題ス、第十七回ノ改版ニ係レリ、仏朗斯、日耳曼、和蘭、以多利、葡萄牙、峨羅（ロシア）ニ於テモ其国語ヲ以テ訳行ス」

とある。よほど広く行われたものらしいが、いまその原本に関する知識がない。内容は四編に分たれているが、その第二編に男女の性交及び貧民救済の方法を述べている点が、極めて切実であるために、その部分を抄訳したものである。要するにイギリスの労働者の貧困の原因を、人口と食物とのアンバランスに求めた、マルサスの理論に立脚したもので、道徳的に性欲を抑制して、産児を制限して、貧窮を少なくすることを論じたものである。日本に於いてマルサス理論を紹介したものとして、大島貞益の抄訳した「馬爾去斯氏人口論要略」（明治十年）について、恐らく最も古いものに属するであろう。

地理論略

ウアルレン著

荒井郁之助訳

四三六頁

地図

文部省発行

丸家善七翻刻

本書の原本は D. Warren-A System of Physical Geography. London, Philadelphia, 1857 である。しかしその凡例に言うように、訳者がかなり意識した部分もあり、また他の書籍から引用して増補したものもある。その内容は総論の外に、第一編 地質、第二編 水理、第三編 気象、第四編 有機体の四部に分たれ、大陸・島・山谷・高原・平野・火山・地震・泉・川・洋・洋動・浪動・潮・洋流・大気・温・風・航海・気候・電気及び視象・植物・生物・人種等を記述している。いわば簡略ながら、自然地理学通論である。明治の初年には、外国事情を知ることが急務であったために、各種の地誌の類は多く刊行されたが、啓蒙的にもせよ、系統的に自然地理学の大要を述べたものとしては、恐らく最も古いものであろう。訳者は人の知るごとく、函館戦役の主将の一人であるが、これだけの素養のあったことは敬服すべきである。

三 「生理学」と「和洋対暦表」

明治十三年には「生理学」の上篇が、翌十四年には、その下篇が出版された。これは明治十五年に合本して刊行されている。その例言によると、ドクトル・チーゲルの講義に基づき、永松東海がこれに諸家の新説また実験を加えて纂述したものである。上篇は血液・淋巴・栄養・血管・腺肝作用・尿汗皮脂・体質・化学的变化・新陳代謝を述べ、下篇は呼吸・体温・筋運動・神経・生殖論を述べている。

チーゲル (E. Tiegel) は、フリードリッヒ・ホルツ (F. Goltz) の門弟であって、明治十年から明治十五年まで、大学東校（明治十年に東京大学医学部となる）の御雇教師として、生理学の講義と実習に当り、また一時断訴医学

（法医学）の講義も担当した。彼によって、生理学は従来の面目を一新したという。

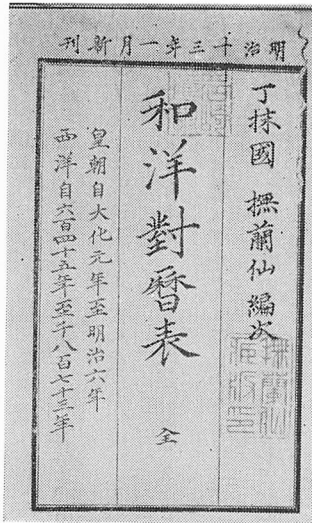
永松東海は佐賀鍋島藩の出身で、天保十一年（一八四〇年）に生れた。緒方洪庵の門人渋谷良耳について蘭学を修めたが、元治元年（一八六四年）に江戸遊学を命ぜられて、松本良順の塾に入って医学を学び、その傍ら開成所に通ってドイツ学を、また箕作麟祥について英学を学んだ。慶応三年には長崎に赴き、ボールドウィン、マンスヘルト、ハラタマ等に、医学・理化学を学んでいる。明治元年には藩の軍隊に従って、戊辰の戦争に参加し、各地に転戦して、軍事病院長として傷病者の治療看護に当った。戦が終わってから、明治二年には東京医学校の三等教授となり、一旦佐賀に帰って、佐賀医学校の改革に当ったが、明治五年には文部省出仕となり、九年には陸軍軍医部に転じ、西南の役には大阪病院に勤務した。明治十四年には一等軍医となり、十九年に陸軍軍医学舎が開設されるに及んで、その教官となっている。その歿したのは明治三十一年である。

全体明治二年に大坂医学校で、ボールドウィンの講義の和訳を「日講記聞」として出版して以来、外人教師の講義録を翻譯して出版することは、すこぶる盛んであった。そうした中で本書は最も出色のもので、当時の医学のトップレベルを行くものと言ってよい。なお「生理学」の他に、衛生学の講義を底本とした「衛生汎論」は、大井玄洞によって翻譯されて、明治十三年に出版せられ、広く世に行われた。また「国政医論」も、三潞、谷口両氏の訳がある。

明治十三年（一月）には、ブラムセンの「和洋対暦表」が出版された。明治五年に改暦が行われると、それまでの太陰暦による歴史上の月日を、グレゴリウス暦に換算することが必要となり、太陰太陽両暦の対照表が編纂された。これは西暦五〇一年から一八七二年に至るものであるが、一五八二年以前には、ヨーロッパでは、ユリウス暦

が使用されていたことを知らず、そのためにかなりの錯誤があった。本書はこれを修正したもので、その対照は、西暦六四五年即ち大化元年から、一八七三年即ち明治六年までに及んでいる。その翌年には内務省から太陰暦と太陽暦に、更に回教暦をも加えて対照した「三正綜覧」が出版されて、研究者に大いに便益を与えるようになったが、本書も簡便なために、かなり後に至るまで用いられたようである。

この対照表の編者ウィリアム・ブラムセン (W. Brunsen 撫蘭仙、1851—1881) は、デンマルクの名家の出身で、コペンハーゲン大学を卒業して、直ちに上海に渡り、大北電信会社に勤務したが、明治四年に日本政府の招聘を受けて、長崎・ウラディウオストク間の海底電線敷設の事業に従事した。その事業を了えると、三菱郵便汽船会社(日本郵船の前身)に招かれて、社主岩崎弥太郎の通訳兼秘書のような仕事に携わった。その後命を受けてロンドン大学に留学して、海事法の研究中急逝した。在日中日本の古銭に興味を持ってこれを蒐集し、一方日本の年表と、



ブラムセン編「和洋対暦表」

ヨーロッパのそれとの対照を企てて、この編著となったものである。なおブラムセン及びその一族については、三三三郎(富永哲夫)の「春秋こぼれ夜語」(昭和四十三年六月私刊)海運の巻帖ノ一に、興味のある記述がある。

統計學要 初篇 小野弥一著 小本 六一
頁 明治十三年

緒言の一節に

「蓋シ統計ノ業タル、明理学ノ理ニ遵ヒ、以テ類別ノ序ヲ定メ、数学ノ法ニ則リ以テ算計ノ式ヲ制シ、能ク天
秘ヲ啓キ神藏ヲ発スルニ足ル、(中略)学者之ヲ概シ、是ニ於テ乎万国統計公会ヲ起シ、各国統計ノ方法ヲ同
一ナラシメントス、顧フニ此業一タビ大成スルニ及ババ天下事物ノ形勢ヲ通觀スルヲ得テ、其民生ニ裨益アル
ヤ亦多弁ヲ費サザルナリ」

とある。著者はこの目的のために、主として万国統計公会の報告書に基づき、傍らドロシユ、プロツク、エンゲル、
ケトレー、モロー等の著書を参考してこの書を編んだものである。その内容は

第一 理論の部

第一章 統計事実の分類

第二章 万国統計公会ノ起源

第三章 統計ノ編制(万国統計公会ノ決議)

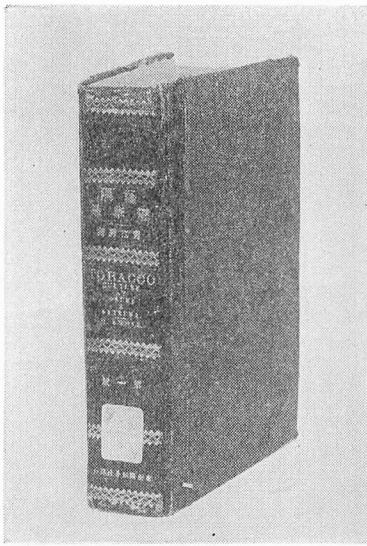
第四章 欧州各国中央統計会

第五章 白耳義国統計一般ノ編制

に分たれている。日本に於ける統計学に関する書物の、恐らくは最も古いものに属するであろう。ただ二篇以下は
出版されたかどうか、その存否を知らない。

四 薩隅煙草録その他

薩隅煙草録 青江秀著^{ひで} 洋装 大判 七〇〇頁 明治十四年出版



青江秀著「薩隅煙草録」

著者青江秀は、天保五年に阿波国那賀郡西方村に生れ、学問を好み博識であった。明治四年紙幣寮の出仕となり、ついで駅遞寮に転じた。現在まで行われている「はがき」という名称は、彼が名づけたものである。七年に職を辞して「東京曙新聞」の編輯總監となった。しかし翌年にはまた官途につき、西南戦役後職を鹿児島県に奉じたらしい。後明治十九年に北海道理事官となり、明治二十三年に歿している。鹿児島県は明治十年の西南の役のために、疲弊の極に達した。そこで新たに県令に赴任した岩村通俊は、これを救済するために、殖産興業に力を尽した。著

者はその命を受けて、明治十一年に薩摩、大隅の各地を巡歴し、その土地の特産物である煙草の栽培について調査した。その結果が即ち本書である。全篇五卷二十八章に分れ、煙草の種子・苗の仕立・植付・糞培(肥料)・煙草の害虫・益虫・煙草の病状・採収・乾燥・連作・休田・土質・産額・相場・耕作費用等について詳記し、更に煙草の香味及び品評・商標・各地への輸出の状況を述べ、終りに日本における煙草の歴史を記述し、英文の摘要を添えている。



「小石川植物園草木図説」

実に当時に於ける西南地方の煙草に関する知識の集大成といふべきである。なお本書の特色といふべきは、本文の説明を助けるために、多数の細密な図版を挿入してあることで、その数は百五十六葉に上っている。(巻末に解説がある) 本書の価値をより高める所以である。

東京大学小石川植物園草木図説 伊藤圭介

賀来飛霞編 洋装 27×41 cm 図版111

明治十四年出版

著者伊藤圭介の大名については、改めて記す必要がない。本書は東京大学の小石川植物園中に栽培された植物について、当時大学の員外教授であった伊藤が、植物園の職員であった加藤竹斎に命じて写生させ、これを図録に作成したものである。第一巻に挙げるところは毛茛科四種、蠟梅科三種、木蘭科十四種、合せて

二十一種の花弁に過ぎないが、和漢名と共に学名を記し、(学名の考定は主としてシーボルト (Siebold) 及びサバティエ (Sabatier) に拠っている) 図版は石版筆彩色であるが、花弁のほかに葇・果実・核等を精細に描写し、「薩隅煙草録」の挿図と共に当時の技術を代表するものというべきである。

第二巻は明治十七年に出版された。28×41 cm 総クロス綴で、図版は三一枚ある。本文六四頁、その中三〇頁は英文であって、松村任三の筆に成るものである。

第三巻はその第八分冊が、明治十九年に刊行されている。緑青色の紙表紙で、本文六頁、図版三枚で、柑橘類の一部に止まっている。その他の部分は、どのような事情があったか、出版された形跡がない。

なおやや後に出版された植物学関係の書籍としては、

日本植物名彙 松村任三編 菊判 洋装 本文二〇九頁・索引九三頁 明治十七年刊

植物学語鈔 松村任三著 10.5×15.5 cm 洋装 五四頁 明治十九年刊

の二書がある。松村任三は常陸・松岡の出身で、当時理科大学助教授として少壮の学徒であった。前者は本邦産の植物約二千余種類について、その学名を、アルファベット順に配列し、これに和名・漢名を記し、さらに所属科名を添えたものである。矢田部良吉の緒言と、編者のはしがきがあるが、緒言はローマ字で書かれ、またはしがきは全部平仮名で左から縦書で書かれているのは、すこぶる珍らしい。後者は植物学の用語を、アルファベット順に配列し、英文・ローマ字の日本語・漢字を対訳したものである。この中には Order, Rui, Ka, 科とあるが、また Family, Ka, 科 Rui とあって、まだ称呼の一定しなかったことが知られる。いずれにしても、当時の植物学が、

まず分類学的研究に主力を注いだことがわかる。なおこの書物の最終頁には、校字三好學とある。三好は後の東京帝国大学教授であるが、当時は理学部の一年生であった。（以上の記述は京都大学教授上野益三博士の記事によることが多い）

なおこの他に発行された植物学関係の書籍としては、若干年代は遅れるが、植物分科學要（松村任三著明治二十三年出版）植物學字彙（大久保三郎・斎田功太郎・染谷徳五郎共編、明治二十四年出版）日本植物圖解第一号—第三号（矢田部良吉編、明治二十四年—二十六年出版）がある。

北門時事

福本誠著

和 二五丁

明治十五年二月発行

著者福本誠は、日南の号で知られている。福岡藩士の子で、明治大正年間に操觚者として文名の高かった人物である。早くから対外発展の重要なことを認め、菅沼貞風と共にフィリッピンに赴いたことは有名である。後に「日本新聞」の記者となり、明治三十八年には郷里の「九州日報」の社長兼主筆となり、四十二年には代議士に選出された。旁ら多数の著書があり、その中で「元禄快挙録」は最も有名である。

本書は明治十三年に著者がほぼ半年にわたって、北海道を旅行した見聞を記述したものである。すなわちこの年五月末に函館に到着して、七重の勸業試験場を視察し、駒ヶ岳麓の森林、落部村に入植地をたずね長万部、磯谷、尻別を踏査し、一旦七重に戻って、更に九月末に札幌に赴き、石狩河沿岸の原野を調査し、十一月に函館を出発して帰京している。同郷の臼井浅夫の序文があるが、本文と共にすべて漢文で書かれている。

明治のはじめ、政府は特に北海道開拓使を置いてその開発を図り、内地から移住する者も、次第にその数が多くなった。特に廃藩置県後職を失なった士族で、この地に農業を営もうとする者が少なくなかった。日南は実にその一人であって、同志を糾合して、自らこれに当ろうとしたのである。それは実に士族に恒産を与えると共に、一方では北門の守りを堅くするためであった。彼が本書の中で、士族による北海道開発の三大利を挙げて、

「神州元氣ハナホ士族ニアリ、然レドモ恒産ナクンバ恒心ナキハ、マタ人ノ常情ナリ、故ニコレヲシテ恒産ニ就イテ以テ恒心ヲ養ヒ、旁ラ文ヲ修メ武ヲ奮ヒ、名節ヲ励マシ、廉耻ヲ重ンゼシメバ、神州ノ元氣ナホ復スベシ。其利二ナリ。且ソレ北海道ハ強魯ノ衝ニ当ル。百万敵愾之民ヲシテココニ移住セシメ、北門ノ鎖鑰ヲ堅クセシメバ、則チ以テ侮慢ヲ禦渠スベク、且以テ窺竄ヲ杜渠スベシ。ソノ利三ナリ」

と言っているのは、実にその心意氣を示したものである。この点から本書は、ひとり日南のみならず、当時の青年の興国の気概とその行動を物語る興味ある文献といふことができよう。

堰堤築法新按

大鳥圭介訳

菊判 二八七頁

明治十五年出版

訳者の緒言によれば、日本に河川多く、灌漑の用が多いのにも拘わらず、築堤の方法が旧来のままで改良を加えないために、霖雨などの際に、水流が氾濫して被害が多いことを憂い、これを改善するために、新しい知識を供給しようとしたものである。原書はアメリカ合衆国マサチューセッツ州のスプリングフィールドのレフエルド社から刊行されたもので、堰堤の構築の方法から、地形による差異を述べ、カンサス、イリノイズ、オハイオ各地の堰堤の

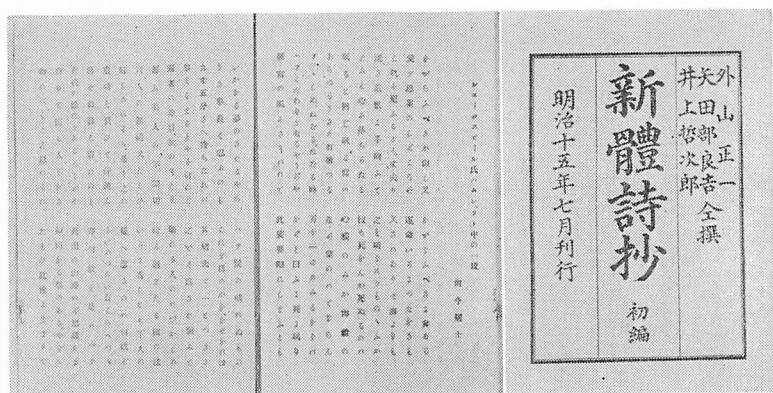
実例について記述している。土木工学の初期の文献として、記憶すべきものであろう。訳者は工部大学長、韓国公使、枢密顧問官などを歴任したが、嘗ては、五稜廓を扼守した主将の一人である。恐らくその当時の同志であった小柳津要人との関係によって、丸善から出版されることになったものであろう。なおタイトル・ページに、碧雲茗圃刊行とあるのは、訳者自身の居宅の雅号であらう。

人身剪形剖体図解 ウィットコースキ（フランス人）著 センブル英訳 安藤正胤・丸山仙二郎重訳

第一巻 図版一折 解説一冊 頸及軀幹之部 27.5×37.1 cm 明治十六年出版

原名を *Movable Atlas of the human body* と言う。着色の解剖図版であって、起絵風おこえふうになって諸臓器の形状と位置とを示している。冊子の形で便利のために、広く行なわれたらしい。その後第二巻・女子生殖器之部、第三巻 男子生殖器之部、第四巻 視器之構造及官能之部が出版されて、四帙となったことが、明治二十六年の丸善の医書目録に見えている。それ以後のことは詳らかでない。

解剖図の序に、人体の解剖模型が発売されたことを挙げて置きたい。明治十六年発行の丸善の洋書並びに文房具目録の末尾に、「東京大学御製造・紙塑人体解剖雛形」というものがある。上等百九十六円・中等百四十円・下等百円である。この広告では、サイズは不明であるが、明治二十六年の目録には、小形（丈四尺五寸）として、同価格が記されており、別に大形（丈五尺三寸）として、一等三百三十五円、二等二百十二円、三等百八十七円の価格が示してある。思うに、はじめに製作されたものは、実際の人体よりはやや小型であったために、その後実際に近



「新 体 詩 抄」

いものを製作したのであろう。いずれにしても当時としては、随分高価なものであって、高等の諸学校の教授用を別にすれば、流行医の診察室などでなければ、見ることのできなかったものであろう。

五 新 体 詩 抄

新体詩抄

外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎共著

半紙判

四二丁

明治十五年発行

この時代の丸善の出版物の中で、最も特色のあるのは、「新体詩抄」である。これは主として自然科学に関する書籍を出版した丸善として、異彩を放っているばかりでなく、日本の近代詩の最初の単行本として、稀有の価値を持っているからである。

「新体詩抄」以前にも、その先駆というべきものはあった。勝海舟の「おもひやつれし君」更に遡っては中島広足の「やよひのうた」などはその例である。しかしこれらは、全く独立したものであって、後に影響を及ぼした事実がない。その点からいって「新体詩抄」は、明治の新詩の祖先といふべきものである。

「新体詩抄」の出版人である井上哲次郎（巽軒）の懐旧談によると、哲次郎は当時東京大学の助教授で、「東洋哲学史」を編纂していた。彼は大学在学中から漢詩を好んで、「孝女白菊の歌」の漢訳（後に「於母影」に収められた）などを試みた。しかしまた一方でテニソン、スペンサー、シェークスピア、ミルトン、テニソン等の詩に接して、その味わいを日本の読書社会に導き入れたいという考えを持っていた。その時矢田部良吉（尚今）は理学部長であったが、同じ考えであって、ある時シェークスピアの「ハムレット」の中の *to be, or not to be* の独自の部分を翻譯して、「東洋哲学史」の編輯所で、井上に見せた。井上は「これは面白い、物になりそうである」といって、これを「東洋学芸雑誌」に掲載した。外山正一（ちゅう山、東京大学文学部長）もまたこれに興味を持っていて、矢田部と独立してシェークスピアの訳稿もあったので、それ以来矢田部と共に、いろいろな英米人の詩を翻譯し、そのあるものは「東洋学芸雑誌」などに掲載した。それが短時日の間にかんりの量に達したので、これを纏めて出版することとなった。これを新体詩と名づけたのは、和歌でもなければ漢詩でもなく、新しい形式のものであるという意味で、井上の案によるものである。

「新体詩抄」の原稿が纏まって、その出版の事を外山と親しい関係があった、丸善の東京店の支配人小柳津要人に相談した。小柳津は快諾して、ここに「新体詩抄」は、丸善から出版されることとなった。

こうして世に出た「新体詩抄」には、三人の作詩訳詩を合せて十九篇ある。その中で外山、山の「抜刀隊の詩」「テニソン氏輕騎隊進撃の詩」矢田部尚今の「グレー氏墳上感懷の詩」などは、最もよく知られたものである。

その小序の中で矢田部尚今が

「方今の学者は詩を賦すれば漢語を用い、歌を作れば古語を援き、平常の言語は鄙となし俗と称して之を採らず。是れ豈謬見と為さざるを得んや。(中略)果して然らば、余以為く、宜く平常の語を少しく折衷し以て稍新体の詩歌を作り、充分に吾人の心に感ずる処を吐露すべきなり」

といっているのは、同人の意図するところを示したものである。

しかし「新体詩抄」に収められた諸作は、これを純粋に文芸作品として見る時は、すこぶる不充分なものであったことは、争うことができない。幸田露伴が

「仮令博士等張良の如しとするも、博浪沙の一撃位の事にて、此後黄石公の教にてもうけ、刻苦鍛鍊されし上
ならでは、天下の大勢は動くまじく、心細き事に候」(「文学界」明治二十九年)

といったのは、作者等の志余りあって、力量の足りないことを諷したものである。

また後に日夏耿之介は、その「明治大正詩史」(上巻)の中で、

「作品其の物としては、殆ど芸術価なき石器時代の遺物にすぎない。他の小説類と並べて、明治開化の土俗品として玩弄する以上の何物もない」

といったのは、極めて手きびしいが、しかしまた剴切な批評というべきものである。

ただそれにも拘わらず、「新体詩抄」には幼稚ながらも、新しい道を切り開いて行こうとする進取の気象があった。それはある程度まで当時の青少年の、たとえ粗雑ではあっても若い感情に訴えた。そのために作中のあるものは作曲されて、詩というよりは唱歌として一般に普及した。「新体詩抄」発行の後何年であるかはっきりしないが、井

上自身本郷の通りで、軍隊が「抜刀隊」の詩を高らかに歌って来るのに驚いたといっている。これが恐らくは軍歌のはじめであって、「抜刀隊」の詩は、いまま軍歌集の巻頭に載せられている。その一般に普及した状態を見るべきである。

なお「新体詩抄」が出版されると、外山正一は一本を携えて、勝海舟に贈った。海舟は喜んで自分も早くこれを試みたことをいい、筐底からオランダの詩を五七調に訳したものを示した。これが「おもひやつれし君」の一篇である。

「新体詩抄」は初版を売り尽したが、当時のことで紙型を取る便宜がなかったので、明治十七年に木版で再版された。これは相当の部数が印刷されたらしい。またその偽版もかなり多く出ているようである。なお「新体詩抄」は初篇とあって、二篇以下も出版される予定であったが、井上哲次郎がドイツに留学するような事情があって、遂に果さないで已んだ。ただ後に出了た「新体詩歌集」（竹内節編）は、ややそれに近いものようである。

朝鮮国志 小本 二冊 四卷 明治十六年三月刊行

清人の無名氏の著作を、関根録三郎（癡堂）が訓点を施したものである。当時日鮮関係が漸く問題となつて来たために、翻刻したものであろう。関根録三郎は明治六年に丸善に入社して勘定方となつてゐるが、詩人として有名で、小野湖山は大沼枕山に譲らないと評している。明治二十三年に五十歳で歿した。

本書の例言には、丸家主人が

「タダソノ近代清国トノ交渉ノ事情ヲ記スルヤ、間々他書ノ未ダ載セザル所ノモノアリ。コレ或ハ読史家参考ノ一助ニ供スベキカ」(原漢文)

と言っているが、全体から見れば、その内容は中国の歴代の史書の外国伝の中から、抜萃して編纂したもので、いわば歴史地理の書物である。その分量も大したものでなく、さして参考するほどのものではない。

論理新編 惹穩著 添田寿一訳 井上哲次郎閲 四八六頁 明治十六年八月

惹穩は W. S. Jevons (1835—1882) である。ロンドンで学業を卒えた後、オーストラリアで貨幣の分析官となり、後本国に帰って、マンチェスター、ロンドン等の大学で、哲学、経済学等を教授した。論理学、経済学、社会改良等に関して、各種の著書がある。本書はその Elementary Lessons in Logic. 1870 を訳出したもので、恐らく邦文で物された論理学の書物では、最も古いものの一つであろう。はじめ分冊五冊として発行されたが、後に合本して一冊となった。

訳者添田寿一(一八六四—一九二九)は、筑前の黒田藩の出身で、明治十七年に東京大学を卒業し、間もなく渡欧してイギリス及びドイツで政治経済学を学び、大蔵省に入って次官にまで累進したが、民間に出て台湾銀行、日本興業銀行等を創立してその頭取となり、財界の大御所であった。また「中外商業新報」、「報知新聞」等にも関係して、その社長となっている。寿一は少年の頃から明敏であって、神童と称せられたが、本書もその学生時代の翻譯に係るもので、その学力の優れていたことを知ることができる。



「近代哲学宗統史」

近代哲学宗統史 総論 卷之一 竹越与三郎重訳

四六判 二三十一〇六頁 明治十七年五月発行

本書はその凡例に述べている通り、フランスのヴィクトル・カウシン〔クーサン〕(V. Cousin, 1792—1867) の原著を、ウェート (O. W. Wight) が英訳して、Course of the History of Modern Philosophy, 2 vols., 1862 と題したものを、更に日本語に移したものである。

著者クーサンはバリに生れて、はじめメーヌ・ド・ビラン (Maine de Biran) についで学んだが、後にドイツ哲学に興味を持って、特にヘーゲル、シェリングなどのロマンティク学派に親しみ、諸説を折衷した。学者としてはソルボンヌ大学の教壇に立ったが、一方行政官としても有能な手腕を発揮し、オルレアン王朝の末期には、チエール内閣の文相となった。フランスの初等教育の基礎を定めたのは、この時であるといわれる。

訳者竹越与三郎 (一八六五—一九五〇) は、三又の文名で広く知られている。武蔵本庄の出身で、慶応義塾に学んだ後、言論界に活動し、「世界之日本」の主筆となった。後に衆議院議員として政友会に所属したが、大正十二年には貴族院議員に勅選せられ、昭和十五年には枢密顧問官に任ぜられている。本書は著者の二十歳の時の訳述であって、その早熟の秀才であったことを知るに足るものである。

原英訳書は二卷三篇に分れている。その第一篇は総論であつて、哲学の概念及びその歴史を論じたものである。訳書は、この中の最初の五章を収めている。即ち第一章 哲学ノ觀念ヲ論ズ、第二章 哲学ノ不滅ナルヲ論ズ、第三章 哲学ノ歴史ヲ論ズ、第四章 哲学史ノ大本ノ觀念、第五章 歴史ノ大時限がそれである。内容に関しては、若干節略したところもあるが、また訳者自身意見を按語として付け加えたところもある。最初に philosophy という言葉について

「余ハ之ヲ訳スルニ經學ナル語ノ適當ナルヲ知り、諸友モ亦タ之ニ同スル者少ラスト雖モ、其今日慣用ノ語タルヲ以テ、且ラク哲學ノ字ヲ以テ之ニ充ツ」

と言っている。フィロソフィは、末松謙澄等はこれを理学と訳し、中江篤介もこれに従がい、後に井上哲次郎などもこれに賛成している。またフランス学者の菊野正宗などは、これを智學と訳している。しかし西周の「百一新論」以来、哲學という訳語が、比較的普通に行われたために訳者もこれを採用したものであろう。

明治の初年のような時代にあつては、ヨーロッパ文化を吸収するに當つて、哲學のような純粹思惟の學問は、実用的な他の諸學に比して、その輸入も紹介も比較的乏しかったことは争われない。しかし明治十年代には、すでにスペンサーの主著は、一部に流行し、シュヴエグラールやユーバーヴェークの哲學史も、(英訳であるが)また少数の學徒の間には読まれていた。今にして見ればクーンサンの訳述も、また若干の寄与を爲したかも知れない。ただこの書は、現在ただ第一冊を見得るに止まつて、それ以後の続刊については、全く知ることができない。あるいは丸屋の事業縮少の余波を受けて、発行を見なかったのであろうか。

日本牧牛家実伝

金田耕平纂述

四六判

明治十九年三月発行

元老院議員由利公正の題字がある。香在艸堂藏版とあるが、これは纂述者の書斎であろう。その内容は文久三年に横浜太田町八丁目で、わが国にはじめて牛乳の搾取所を開いた前田留吉、コンデンスミルクの製造に苦心して成功した辻村義久、その他東京府や千葉県で搾乳所を開いた人々十三人の、簡単な伝記を集録したものである。明治初期の牧畜事業の発達的一面を知るために、極めて貴重な資料であり、また珍しい記事である。これが第一巻のみで終わっているのは、すこぶる遺憾である。

南洋時事

志賀重昂著

四六判

一八一九六十八頁

明治二十年四月出版

著者志賀重昂しげたか（一八六三—一九二七）は矧川と号し、明治から大正にわたって、特色ある文章家として知られている。岡崎の出身で、父熊太は維新の際小柳津要人の上司であった。この書は恐らくその関係で丸善から発行されたのであろう。重昂は早く札幌農学校の業を了え、一時は政党に関係して、農商務省や外務省に籍を置いたこともあるが、その本領は文筆にあって、明治二十一年三宅雄二郎（雪嶺）と共に「日本人」を創刊して、日本主義の論陣を張った。明治二十七年には「日本風景論」を著して、日本の風景美をたたえ、広く名声を博した。以来日露戦役に従軍し、また幾度か世界を周遊し、地理学者として活動したことは、周知の事実である。

本書は彼が明治十九年から翌二十年にわたって、海軍兵学校の練習艦筑波に便乗して、南洋諸島を巡航して視察

した結果を、公けにしたものである。巻頭に杉浦重剛の批語と著者の自序と緒言と *Arise ye sons of Yamato's land* と題する著者自作の英詩があり、巻末に著者の自跋がある。本文は勿論著者自身の実地の見聞に基づくところが多いが、その他に各種の資料特に新しい統計の類を多く載せているので、紀行というよりは、むしろ地誌に近い。特に最近のヨーロッパ人の占領とその支配に関して、有色人種としての感慨を洩らしているところは、正に經世の書である。その行程はクサイ（ストロング島）、オーストラリア、ニュージーランド、フィジー、タンガロア、サモア、ハワイにわたり、各地の現状を述べて、それぞれ日本の事情と関連させて論じている。当時の多数の日本人に取っては、有用な新知識であると共に、また海外発展のために、強い刺激を与えるものでもあったであろう。文中に著者の得意とする漢詩を挿んでいるのも興味を惹く。そのためにこの書は非常な売行を示し、明治二十二年に増補三版、二十四年に改訂四版を公けにしている。本書はその書名からいっても、著者の志向からいっても、さきの福本日南の「北門時事」と、好一對を為すものといえるであろう。

六 文部省「百科全書」

書物に知識の全系統を意味するサイクロペディア (*Cyclopaedia*) あるいはエンサイクロペディア (*Encyclopaedia*) の名を冠するのは、十六世紀にはじまるという。しかし、それが現代のものに近い形で出版されたのは十八世紀である。一七二八年に「百科全書の父」と呼ばれるエフレイム・チェンバース (*Ephraim Chambers*, 1680—1740) が独力で著わした二巻の「サイクロペディア」(一七二八年ロンドン) が、その最初のものである。フラ

ンスでこれを翻譯したが、出版の際に支障があつて、フランス人自身の執筆のものによって代えることとなり、ここにディドロ (Diderot) によって、新しい百科全書が編纂された (一七五二—一七七二)。その執筆者に当時の進歩的思想家を網羅したために、知識的思想的に重大な意味を持っていることは、いうまでもない。

これと時を同じうしてイギリスでは、一七六八—一七七一年に、有名なエンサイクロペディア・ブリタニカが出版された。初版は三巻本 (百分冊) であったが、第二版は十巻 (一八一分冊) となり、第三版は十八巻 (三〇〇分冊) となり、次第にその分量と内容を充実させた。

日本における百科全書の歴史もまた、ヨーロッパのそのの翻譯にはじまる。それはすなわち「厚生新編」である。本書の原本はもとフランスのシヨメール (N. Chome) の編纂したものを、オランダ文に訳して増補を加えたホイスウデライク・ウォールデンブック (Huishoudelijk Woordenboek. 1772) すなわち家庭百科事典というべきものである。日本には寛政年間 (一八〇〇年頃) に輸入され、蘭学者の間に重宝された。そのために、文化八年 (一八一一年) に、幕府は天文方高橋景保に、これを翻譯すべき命令を下し、景保はこの任務をもと長崎通詞であつた馬場佐十郎 (貞由) に委ねた。馬場は当時の錚々たる洋学者であつた大槻玄沢 (茂質)、大槻玄幹 (茂禎)、宇田川玄真 (璞)、宇田川榕庵 (榕)、湊長安 (重胤)、小関三英 (好義) 等の協力を得て、その翻譯に従事した。これが世にいうシヨメール御用である。大槻玄幹は「蘭学事始付記」の中で

「五十年來蘭学の公学となりし始なり」といっている。

訳稿は何しろ尨大なものであるから、出来上ったものを数冊ずつ呈上し、文政十二年（一八二九年）には、その稿本は四十巻百二十冊に達した。第六十巻が献上されたのは天保六年（一八三五年）で、訳稿は七十巻で、ほぼSの部にまで及んでいる。

「厚生新編」は、はじめは全訳であったが、後には内容があまりに多いために抄訳となった。天文地理・動植鉱物・人身・医薬・食物・産業の各部に及んでいて、当時としては最高の註が施してある。殊に医薬に重点が置かれているのは、訳者に医家が多かったためであろう。政治・経済・法律・哲学等を欠いているのは、一つには訳業の中途で起ったシーボルト事件などが影響したこともあったのではないかと思われる。

残念ながらこの日本最初の百科全書は、ついに完成を見ないで終った。天保十一年（一八四〇年）の蜜社の獄による蘭学の圧迫は、訳業そのものを中絶させたばかりでなく、訳稿の世上に流布することをも禁止した。そして幕府に呈出された訳稿は、著書調所から開成所に移され、最後には静岡の葵文庫に蔵せられて、久しく日の目を見ないでいた。それが昭和十二年（一九三七年）すなわち最後の稿本が出来てから百年後に、葵文庫長 貞松修蔵氏の努力によって、はじめて活字印刷として公刊されたことは、実に先学の努力を顕彰したものとすべきである。

「厚生新編」の訳述が中絶してから四十年の後に、明治になって最初に公刊された百科事典は、実に文部省「百科全書」である。本書については福鎌達夫氏の「明治初期百科全書の研究」に、精細な研究がある。本書の原本は、チェンバース兄弟（日本でいわゆるチャンブル）の編纂による「国民須知」（柳田泉の訳による）（W. & S. Chambers-Information for the People. 2 vols., 1856—1858）である。チェンバース兄弟すなわちウィリアム及びロ

バートは、スコットランド人で、文学・地理・歴史等に関する著書がある。一八一九年エディンバラで出版会社を起し、「文学・科学・美術雑誌」(Chambers' Journal of Literature, Science and Arts)を発刊して名声があった。特に百科事典に興味を持ち、「チェンバース百科事典」(Chambers' Encyclopaedia. 10 vols., 1859—1868)を編纂した。この書は他の百科全書とともに広く行われ、その後数次増訂されて、最近一九六七年には十八巻本が刊行されている。

「インフォメーション」は、これとは別に、はじめ「教育講座」(Educational Course)の形で立案されたもので、小項目の事典でなく、各科目の概説を集成したものである。初版は一八三三年から三五年にかけて刊行されたが、一八五六年から五八年にかけて第四版が公けにされた。福沢諭吉は、再度の渡米の際に、これを携えて帰ったらしい。また大学南校の教頭であったフルベッキ(G. F. Verbeck)が所持していたという説もあるが、やや年代が合わない。いずれにしてもこの書物は、多くの学問また知識の概要を纏めたもので、啓蒙的な時代には極めて便利なものであるから、明治のはじめに文部省の編輯頭(明治四年九月就任)、後に翻訳局長(明治六年五月就任)となった箕作麟祥は、その全訳を企て、本書を分割して、それぞれ語学に通ずる者に翻訳させ、その不熟の文章は更に編書課長(明治六年十一月就任)の西村茂樹が、課員に命じてこれを修正させた。その事業は随分困難であつたらしい。団牌と歌加留多、捉影術と写真術のように、用語が訳者によって、前後で異なっていることなどは、その一例である。翻訳者も必ずその専門によるというのではなく、ただ英文を理解することの出来る者に依頼したために、法律経済学者であつた大島貞益(益三郎)が「土工術」「北亜米利加地誌」「回教及印度教仏教」を、医学者

であった坪井為春が「養樹篇」を、数学者の菊池大麓が「修辞及華文」を、国語学者の大槻文彦が「印刷術及石版術」を、銀行家の高橋是清が「衣服及服式」を訳しているようなめづらしい例がある。後に実業家として名を成した永井久一郎（禾原、永井荷風の父）が「水運篇」や「希臘史」を訳しているのも興味を惹く。多くの科目の中で難解な内容のもの、例えば心理学などは誰も訳する者がなく、麟祥自身がこれに当たったという。その稿料は平均二十十字十行二円であったが、麟祥のそれなどは、一枚四円であった。当時の一般の物価と比較すると、驚くべき高額であった。訳者の中には吉原に流連^{いっぴ}して、金に困ると二三枚訳して、文部省に使を出して稿料を受け取った者もあったという。この頃の都々逸に

足らぬわたしにや読めないしうち 早く翻譯して欲しむ
というのがある。

こうして訳出された稿本は、必ずしも原書の編集の順序によらずに、文部省から逐次に刊行された。その年次ははっきりしないが、恐らく明治六年頃にはじまり、明治七年中に医学篇・交際篇・経済篇・養生篇・商業篇・家事倭約訓・人種篇・漁獵篇・植物生理学・電気篇の十項目が発行された。これらはみな一科目二分冊であるが、明治八年の後半からは一科目一冊となった。いつ頃まで継続したのか詳らかでないが、十六年八月に「農学」（松浦謙吉訳）が出たのが最後らしい。すべてで九十二篇あって百種に近い。百科全書という名称は、恐らくこの内容から名づけられたものであろう。全書というの「陽明全書」など、すでに古くから中国にある名称である。

明治三十年から博文館で、当時の新進の学者の執筆によって、人文科学・自然科学の各方面にわたって、「百科

全書」「続百科全書」の二種の叢書が出版されて一般に普及したが、その名称及び組織はこれを襲ったものに違いない。その後百科全書の名は、事典に専ら用いられるようになったが、近年岩波書店から刊行されている「岩波全書」なども、やはりその体例と共に、その名称も、その影響を受けたものということができる。

この文部省版「百科全書」は、冊数が多く、また製本がいろいろ違っていて、不便な点が多かったので、これを適当に纏めることが各方面から要望された。そこで丸善では、当時慶応義塾出身の赤坂亀次郎が蔵版部長であったが、文部省版でまだ訳出されていない部分があるために、原書を増訂した第五版の二巻本（一八七四—七五年）によって、新らしく翻訳者を選んで、これを翻訳し、全部を十二冊または三冊と索引一冊に分けて出版することとなった。

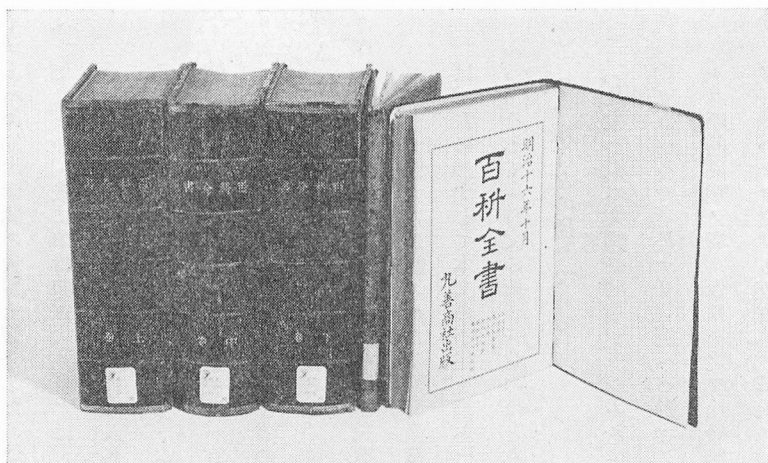
上巻 第一冊—第四冊 一四九〇頁

中巻 第五冊—第八冊 一四四二頁

下巻 第九冊—第十二冊 一五一八頁

十二冊本は布表紙、三冊本は背革表紙の装釘であって、別に希望によって総革表紙三方金の特製本も作った。チエンパースの「インフォメーション」は、すべて概説的な記述であるが、この索引によってある程度まで小項目にも利用することが出来る。総頁数四千六百頁に達し、この時代としては実に驚くべき出版物である。

この出版は当時として珍らしい予約によって行われた。明治十六年四月に予約が発表され、予約者が一千に達した時は出版するが、一千に満たない時は計画を廃棄するかも知れないことを予め断わり、着手後は一か年で完了す



「百 科 全 書」

る予定で、払込金は毎月一円であった。恐らく日本で最も古い予約出版の一つであろう。

予約の募集は順調に応募を見た。そこで明治十六年十月に、その第一冊が発行され、翌十七年十月に第十二冊の発行を終り、更に十八年一月には索引が発行されて、この刊行は完成するに至ったのである。

前にも述べたように、この「百科全書」は、已むを得なかったにしても、それぞれの科目の訳者が必ずしも専門家でなかったたのであるから、そのあるものについては、良訳といい難いものがあるのは勿論である。石井研堂がその「明治事物起源」(上巻)の中で、

「訳者は多勢にて、中にはさっぱり文意の通ぜざる悪本もあり、併しこの本の由来を極むれば、寧ろ分らざるが当然なり」

と手きびしい批評を加えたのも、ある点では当たっている。しかし何といっても明治十年代に、部分的にもせよ、ほぼその当時のヨ

「ロッパの知識学問の概要を紹介したのであるから、日本の知識階級に寄与するところが大きであつたことも、疑うべきではない。後に田口卯吉（鼎軒）は、彼自身の編纂した「日本社会事集」の跋文の中で

「今や泰西政事類典成り、大日本人名辞書成り、日本社会事集成る。而して別に我が文部省に於て百科全書（真正の百科全書にあらずチャンパー氏の「インフォルメーション」なり）の訳あり。故に泰西の政治及び経済の事項を知らんと欲するものは、宜しく泰西政事類典に就いて見るべし。而して泰西の歴史及び學術に就いて尋ねんとするものは宜しく文部省の百科全書に就いて見るべし。此の四書は実に日本の百科全書なり」といっているのは、公平な批評である。

坪内逍遙の「小説神髓」の第一章小説総論の終りに

「菊池大麓大人が訳されたる修辭及華文と題せる小冊あり。詩文に関する議論の如きは、最も精到と思はるれば、左に抄出して本文の不足を補ふ」

とある。そして「詩文の術」一章のほとんど全文を引いている。その中の「比喻・象喻（コムハリソンメタフォール）」の一節は左の通りである。

「比喻ハ概ネ文詞ヲ明晰ナラシムルニ用フル品格ニシテ、即チ曖昧不明ノ事物ヲ明解スルカ為ニ浅近顯白ノ事物ヲ仮用スル者是ナリ。例ヘハ動物ノ呼吸ヲ象似スルニ尋常風櫃ヲ以テスルノ類比喻ノ恰モ当レル者トス。然ルニ不倫異類ノ者ヲ仮リテ之ヲ比喻形容スルトキハ大ニ二人ノ心意ヲ快適シテ自ラ其巧モ顯ハルモノナリ。左ノ一篇ハチヨウサーガ古ヘノ郷土ヲ形容スル所ノ詞ニシテ、比喻ノ最モ巧ミナル者トス

錦繡光ハ宛モ春野赤白ノ花ノ如シ 終日笙ヲ弄シテ又曲ヲ唱フ 靚装ハ五月ノ景ヨリモ鮮カナリ」

これによって、逍遙の美学や芸術論が「百科全書」から大きい影響を蒙っていることがわかる。

ところが後の明治文学研究者には、この「修辞及華文」がどのようなものであるかがわからないで、その実体は久しく疑問とされていた。たまたま木村毅博士は神田の古書店で分冊本を発見され、これによって久しい疑問も氷解した。当時「明治文化全集」が編集中であったので、「修辞及華文」はその「文芸篇」に収められることとなつたわけである。

七 「想 夫 恋」

これらの書物とかなり性質の違っているのはボッカチオ (Giovanni Boccaccio) の翻訳である。ルネサンスの文人としてのボッカチオの名と略伝が日本に伝えられたのは、早く明治二年に出版された河津祐之の訳述した「西洋易知録」(巻四)に遡る。しかしその作品がはじめて紹介されたのは、明治十五年に出版された「歐洲情話群芳綺話」がはじめである。大久保勘三郎が「デカメロン」のフランス訳から七話を訳し服部誠一の校閲を経たものであって、頗るめずらしいものである。これに次いで公けにされたのが丸善発行の「想夫恋」である。これもまたカストルのフランス訳の「ボッカチオ短篇集」(A. Sabatier Castres-Contes de Boccace. 1880)からその第五日の第七話を佐野尚が訳出したものである。菊亭静が補閲し、田島象二(酔多道士)ら三家が鼈頭に合評を加えている。活版和紙片面刷四六判和装本で、序文二丁本文四六丁ある。扉に臨池書院蔵版とあるのは訳者の池の端の住所らし



「想 夫 恋」

い。文体はもとの人情本そのままであるが、会話に口語を取り入れてるのは注目するに足りる。

しかしこの訳本で最も重要なのは、ビゴー (G. Bigot) のエッチングが挿絵となっていることである。ビゴーが明治初年に日本にあって、風俗その他を諷刺的に描写して有名なことはいうまでもない。本書には彼の筆に成る屏絵、挿絵合せて四枚あって、すこぶる異彩を放っている。なおこの

書物の巻末に、訳者も校閲者も挿絵画家も「想夫恋」と全く同じ人々によって、「仏国女皇春遊伝」という書物の広告が出ている。広告の文意から考えると、第二日の第八話らしい。これは果して刊行されたかどうか不明であるが、多分出版されなかったものと思われる。

八 定期刊行物

最後にこの時期に丸善から発行された定期刊行物について、簡単に記して置きたい。それは「東京学士会院雑誌」である。東京学士会院は当時の学術界の大家をメンバーとして創立されたもので、ほぼ現在の日本学士院の前身といえるものである。明治十二年一月に、修文館で最初の会合が開かれ、六月に二十一人の定数が備わった。

はじめ毎回の集会の紀事の要目の概要を、「東京学士会院紀事略」と名づけて、十五号まで刊行し、同時に演説の筆記などを「東京学士会院雑誌」と題して、八冊まで刊行したが、重複するの嫌いがあるために、明治十三年から、「紀事略」を廃して、すべて雑誌に掲載するようになったものである。そしてその出版人は丸屋善七となっている。

いまこの雑誌の内容を、一々に互って紹介する邊はないが、その初期のもの、極めて一部を挙げると、福沢諭吉「教育論」、加藤弘之「女子の教育」、伊藤圭介「本邦博物学起原沿革説」、神田孝平「邦語ヲ以テ教授スル大学校ヲ設置スヘキ説」、重野安繹「漢学宜ク正則一科ヲ設ケ、少年秀才ヲ選ミ、清国ニ留学セシムベキ論説」、小幡篤次郎「専門学校ノ功要ヲ論ス」、杉田玄端「動植二物ヨリ産スル食物ノ生体ニ功用ヲナス略説」、西村茂樹「大学ノ中ニ聖学ノ一科ヲ設クベキ説」、重野安繹「国史編纂ノ方法ヲ論ズ」などがある。教育問題についての論議の多いことは、注目すべきである。この「東京学士会院雑誌」は、明治三十四年三月、第二十三篇第三号で終わっている。

ここで序に丸善が発行書肆として名を列している、類似の一二の刊行物について言及したい。その一は「学芸志林」である。「学芸志林」は、東京大学の法・理・文三学部の編纂による機関雑誌といふべきものであつて、早く明治十年八月から刊行されたものである。その刊行趣旨にいう

「学問ノ方一ニシテ足ラス、大要力ヲ専修ノ門ニ用フヘシト雖モ、抑亦別ニ自ラ其見聞ヲ弘ムルノ具無カルヘカラス。是レ即チ此書ヲ編纂スルノ本意ニシテ、凡ソ欧米学芸新聞並ニ其新刊諸書等ヨリ内外諸名家ノ論説ニ至ルマテ、今苟モ学芸ニ関スルモノハ、得ルニ随テ或ハ訳シ或ハ抄シ、以テ逐次刊行セントス。後生其科業ノ余暇、時ニ瀏覽採択スルアラハ、材行涵養ノ功ニ於テ未タ必シモ小補無クンハアラスト云爾」

その第一巻の第一冊には、「大島火山記」理学部教授エドマンド・ナウマン、同助手和田維四郎、第二冊には「学問ハ淵源ヲ深クスルニ在ルノ論」西周講述、「病室心得」乙骨太郎乙抄訳、「版權所有ノ論」法学部教授井上良一講述、同中級生徒川上謹一筆記、第三冊には「古代地説」乙骨太郎乙抄訳、「費府博覧会ノ教育ニ大益アリシ事」文部学監ダヴィット・モル演説、第四冊には「工業教育論」理学部教授ロベルト・ヘンリー・スミス演説、同助手久木信順訳、「鼠ノ有用説」乙骨太郎乙抄訳、「潮汐新説」乙骨太郎乙訳、第五冊には「刑法志略」横山由清、「東京府下水試験説」理学部化学教授アトキンソン著、同化学卒業生久原躬弦・宮崎道正合訳が掲載されている。その奥付には発行書肆として、報知社、須原屋、山城屋、和泉屋、大橋操吉などと共に丸屋の名が出ている。しかも東京の丸屋善七、横浜の丸屋善八、大阪の丸屋善蔵、京都の丸屋善吉、名古屋の丸屋善八と、本支店が尽くその名を列しているのは、その関係の深いことを思わせる。ただ「学芸志林」は、その存続期間はあまり長くなく、明治十七年二月に、七十九冊で終わっている。

「学芸志林」に対して、その寿命の長かったのは「東洋学芸雑誌」である。これは明治十四年十月にその第一号を発刊したが、その緒言には、左の通り述べている。

「我邦人ノ理学ノ思想ニ乏シキハ、識者ノ常ニ憂フルトコロナリ、故ニ之ヲ救ハシカ為ニ、此雑誌ニ理学ニ関係アル文章ヲ掲載シテ、其性質及ヒ功用ヲ世ニ明ニセンコトヲ力メタリ。固ヨリ詰屈解シ難キコトノミヲ討論スルニ非スト雖トモ、世尚ホ或ハ此雑誌ノ読ミ難キヲ困シムモノナキニ非ス。因テ更ニ其区域ヲ広メ文芸上ニ渉レル平易ナル文章ヲモ其間ニ雜ヘ、甘苦相半ナラシメ、以テ世人ノ望ニ負ク無キヲ期スト云爾」

その第一号には、論説として「人為淘汰ニヨリテ人才ヲ得ルノ術ヲ論ス」加藤弘之、「題有機化学沿革史後」杉浦重剛、雑報として「学芸論」井上哲次郎があり、なお「落雷の説」「下野那須野原殺生石の事」「砒毒の作用」「毛ダニ小蟲の毒」などが掲載されている。

この雑誌の発行所は東洋学芸社であるが、大売捌には、沢屋、巖々堂と共に、丸善がその名を列している。そして最初の持主は山城屋源次郎であったが、三十号から有田定次郎となり、小柳津要人が編輯人となっている。小柳津要人は、当時丸善の洋書部主任であった。丸善と関係の深かったことが想像される。

「東洋学芸雑誌」はその緒言にいうように、自然科学の研究並に紹介を主とするものではあったが、人文科学また文芸に関する論文も、かなり収録されたために、一種の総合雑誌として、久しく一般の需要があった。しかし各特殊科学が分化発達して、それぞれ独立した機関雑誌を持つようになると、その存在の理由が次第に薄らぎ、大正十一年四月の四七一号からは、「学芸」と改題され、内容も著るしく通俗的となった。しかしこれも結局はそれほどの効果を挙げず、大正十四年五月には、再び由緒のある「東洋学芸雑誌」の名称に復したが、昭和五年十二月、第四十六巻第八号で終りを告げた。しかしこうした性質の雑誌として、これは已むを得ない運命であったかも知れない。